HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	江戸時代の高山寺僧「永辨」について
著者	徳永，良次; Tokunaga，Yoshitsugu
引用	北海学園大学人文論集(64)：316(1)-291(28)
発行日	2018-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

江戸時代の高山寺僧「永辨」について

徳永良次

一

京都の古刹高山寺は、明恵上人が神護寺の別所であった十無盡院の地を後鳥羽上皇から賜り、華厳・真言兼学の寺院として隆盛を誇った。高山寺における活動については、草創期の鎌倉時代に関しては、相当程度明らかにされている。しかしながら、室町時代以降、次第に自然災害や戦乱を受け荒廃していったため、中世以降の活動には不明な点が多く、今なお未解明のまま残されていると言っても過言ではない。明治期に入り、廃仏毀釈の混乱を避け、貴重な文化財を保護すべきであるという機運を受け、ようやく落ち着きを取り戻していった。つまり、室町期から江戸期にかけて四百年以上もの間、非常に不安定な状況に陥っていたのである。

筆者はかつて「高山寺代々記」と称される、寺内の子院代々を記載した資料について検討・紹介したことがある。(注一)その中の十無盡院第十六世の部分に「永辨」と僧名があり、その右肩に「中興」という書き入れがあることが注目される。別に三尊院の十二世「秀融」にも「中興」と記載されている。「中興」とあるのは、この二名のみであって、いつ・誰が・なぜ、このような名称を冠したのか、また、その理由については十分に明らかになったとは言えない。この二名の僧侶共に、先行研究でほとんど触れられたことのない人物である。とりわけ、永辨の事績に関しては、これまで網羅的な紹介がなされたことが

なく、近世高山寺において如何なる位置づけにある僧侶なのか、ここで検討すべき時期にあると考え、まずはその基礎的作業として、寺内に現存する永辨に関する資料を可能な限り取り上げて、紹介・検討してみたい。なお、ともに「中興」とされる「秀融」に関しては、現状では資料が見当たらず、後日、別途検討したいと考えている。

二

江戸時代における高山寺僧と高山寺の歴史についての研究で管見に入った主要なものは次の通りである。特に、永辨に関して直接言及している資料を優先して紹介し、他に関連した時代や活動に関わる論考も触れていくこととする。

1　葉上照澄『高山寺』(注一)

葉上師は、明恵上人の事績を中心に、その後の高山寺の歴史について概観されている。特に、従来未解明・未検討の、中世から近世の歴史の整理は卓越したものであり、豊富な高山寺資料を駆使して一般の読者層にも分かりやすく解説している。

（二）

中世、特に応仁の乱以降における高山寺内の荒廃ぶりについて、葉上師は以下のように指摘している。

十無盡院代々名は応仁頃から消え、慶安頃（一六四八）から再興に当たった中興十六代永弁に至るまで二百年余の断絶の期間がある。

東坊方便智院代々も天文頃で消え、最後の二代は三尊院代々と同名なので三尊院と合併又は断絶と考えられる。わずかに田中坊善財院、尾崎坊三尊院、山本坊報恩院、宝性院が高山寺最悪の戦国時代を連綿と存続したらしい。（『高山寺』p113）

波線部に示したように、永辨を「中興」と記している。これが何を根拠にしたものかは明記していないが、筆者の知る限り、永辨を中興と記す資料は、村上素道『栂尾山高山寺明恵上人』記載の「代々記」しかない。(注二) 続けて中世末期の内乱が引き起こした被害については以下のように記述する。

天文十六年（一五四七）七月、細川晴元が高雄を攻略した時、高雄の伽藍と共に高山寺の金堂・十三重塔伽藍の多くは灰燼に帰し、仏像等の貴重な寺宝が多数焼失し、わずかに石水院・御廟・経蔵（又は鎮守社）・仁王門・院坊三坊と想像される七つの建物が残存した。（同ｐ113）

次に、近世における高山寺について以下のように触れる。本稿に関係の深い部分のみを引用する。

復興の業は江戸初期の寛永十一―十三年（一六二三―三六）、秀融上人、永辨上人等によりはじめられ、金堂・開山堂が復興を見た。この時の金堂が現在の金堂である。

現在の高山寺金堂は寛永年間、仁和寺覚深法親王の御願、家光の令旨をもって、板倉周防守の奉行により仁和寺古御堂を移転したものであるという。（同ｐ114）

このように、江戸時代に入って、幕府の庇護により寛永年間に復興の業が実施された。この時の中心となったのは仁和寺の覚深法親王と顕証である。覚深法親王は、仁和寺二十一代、後南御室と称せられる。高山寺との関わりは、寛永十年の聖教の整理と目録の整備がある。また、翌十一年には、寺内外の措置に関する「高山寺置文」を定めた。

顕証は一五九七年生まれで仁和寺心蓮院のち尊寿院に住し、宥厳と高山寺菊淵から広澤流を承け、その後仁和寺高山寺の寺基整備にあたり、さらには両寺の聖教整備に尽力した。[注四] 葉上師は、覚深法親王・顕証と秀融・永辨とが、高山寺復興に際して、如何なる関係にあったのか、具体的な事実・資料等までは示していない。

2　奥田勲「高山寺経蔵の室町・江戸時代の典籍について」[注五]

この論考は、主として聖教文書等の典籍類がどのように保管されていたかについて、現存する聖教目録を網羅的に検討したものである。特に、室町時代文明年間に成立したと考えられる『方便智院聖教目録』（旧目録）と、江戸時代寛永年間に、現存書籍に従って整理された『方

便智院聖教目録』（新目録）の両者を詳細に比較検討し、室町期から江戸時代初期の典籍がおかれた状況について論じている。

さらに、江戸時代初期における覚深法親王を中心とした経蔵の再整備については、覚深法親王の残した「仁和寺宮覚深法親王高山寺置文」二種を中心に紹介し、この時期における寺内経蔵と典籍のおかれた状況を論じていき、結論として以下のようにまとめている。

中世末期の内乱的な状況は、古代・中世を通して形成されて来た有形・無形の文化的遺産の伝承を大きく阻害するものであったのだが、高山寺の場合もまさしくそれに該当するといってよい。この時期に失われたのは典籍文書の大きな部分であるというだけではなく、その典籍文書の有していた体系や秩序も失われてしまった。江戸期の整理はそれを回復するのにかなりの力はあったと考えられるが、必ずしも十分ではなかった。しかし、高山寺の典籍文書はその後の関係者の護持によって、主要な部分はきわめてよく保存されている。（同p140）

（四）

3　『方便智院聖教目録』（新目録）（金水敏「方便智院聖教目録解題」、『明恵上人資料第四』、東京大学出版会、1998年）

前述した奥田氏の論考の内、江戸時代寛永年間に、この時点で現存していた聖教・書籍を保管・整理するため作成した『方便智院聖教目録』（新目録）についての、影印・翻刻・解題である。金水氏は、この中で書誌的事項、新旧目録間での比較、さらには方便智院本の性格と成立等について検討する。

高山寺経蔵の聖教目録については、従来、鎌倉時代の草創期に作成された目録と、そこに記載された聖教の性格を通じた研究が多かったが、この論考によって初めて江戸時代の聖教目録とその成立についての検討がおこなわれ、注目されるようになったと言える。

4　近世末の高山寺僧「慧友」の事績

江戸時代における高山寺僧の研究は、慧友僧護を外すことは出来ない。慧友は江戸時代末期に高山寺に住した僧侶であるが、膨大な聖教類にその名、あるいは書き入

れなどを残し、現在の研究に極めて有益な資料となっている。慧友の記録がなければ、高山寺草創期における活動が未解明のままである事項も非常に多い。しかしながら、その慧友に関する事績についての研究は非常に少ない。近年になって以下の論考が知られる程度である。

1、小宮俊海「慧友僧護について　―高山寺所蔵典籍文書に基づく年譜資料―」[注六]

表題の通り、高山寺に所蔵されている典籍文書や、その他研究資料・論文等から、慧友に関する記事を網羅的に調査し年譜とした労作であり、これによって慧友の高山寺における事績を概観することが可能となった。

それ以外に、松尾芳樹「六角堂能満院工房と律僧憲海」（京都市立芸術大学、2015年）がある。これは、松尾氏の博士論文であり、京都市立芸術大学大学院の博士学位論文として氏が提出したものが公開されている。内容は、江戸時代末期の六角堂と憲海という僧侶についての美術史的研究であるが、その中に憲海と関わりの深い僧侶として、慧友が取り上げられ、憲海とともに慧友の高山寺における活動を紹介している。

5　筆者による論考

以上の先行研究の他に、筆者は、中世・近世の高山寺の活動状況を検討した論考を公開している。

寺内子院である方便智院と『方便智院聖教目録』の関係について、現存する聖教に記載された記事や目録類から定量的に検討したことがあり、聖教の大幅な減少は見られるものの、江戸時代にかけて方便智院聖教は比較的まとまった形のまま保管されてきたことを明らかにした。[注七]

他に、江戸時代の子院の名を冠した聖教目録類三種について、翻刻と書誌を中心に紹介したことがある。

①「『高山寺地蔵院聖教目録』について」（平成二十四年度高山寺典籍文書綜合調査団編「研究報告論集」、2013年）

②「『高山寺蔵（善財院聖教）目録』について」（平成二十五年度高山寺典籍文書綜合調査団編「研究報告論集」、2014年）

③「高山寺蔵『栂尾聖教目録』について」（平成二十六年度高山寺典籍文書綜合調査団編「研究報告論集」、

2015年)

先の1にも紹介したが、中世末期の内乱を経た高山寺に残った僧房は、田中坊善財院（地蔵院）、尾崎坊三尊院（十無盡院）、山本坊報恩院、宝性院などであり、他の由緒ある塔頭名は資料を辿る限りほとんど見いだせなくなっている。そんな中でも、地蔵院は中世末期から近世初中期にかけて、隆盛を誇ったと見られる数少ない僧房である。ここには、ある程度まとまった聖教が保管され、その目録も作成されていたことが現存資料から知られる。上記の①から③は、それら子院の聖教目録についての論考である。

また、「持戒清浄印信」という資料を通して、中世から近世の寺内子院と、それを代々相承した僧侶に関して検討した論考も公開している。

④「持戒清浄印信」の写本とその価値の変容(注八)

「持戒清浄印信」は、明恵上人が紀州にて修行していた時に、上人の現前に文殊菩薩が現れ持戒清浄の印明を授けたとされる奇瑞を、代々の僧侶が相承していたことについて検討したものである。この中で、代々の相承が特に中世後期に盛んになり、江戸時代にかけて次第にその「印明を伝授する」という、それ自体に権威性を帯びていくことを明らかにした。

（十八）

三

上述したとおり、江戸時代における高山寺とりわけ僧侶の事績についての研究は極めて少なく、特に江戸初期の高山寺については、寛永期の覚深法親王・顕証といった仁和寺の僧侶についての研究から見た、高山寺復興という観点からしか研究がなされていないのが現状である。

そこで、本稿では、一部資料等に「中興」と記載された永辨の事績について、高山寺の典籍文書を網羅的に調査し、また、管見に入った、あるいは新発見の資料も含めて、以下年表形式で整理していくこととする。

本稿で主に参照した資料は、以下の通りである。

1、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺典籍文書目録』第一～四、索引、完結篇

2、同　『高山寺古文書』

3、同　『高山寺経蔵古目録』
4、同　『続高山寺経蔵古目録』
5、同　「研究報告論集」昭和五十六年度～現在まで（五十七年度を除く）

上記の資料の索引等から永辨に関わる記述が含まれる資料を抜き出し、年代順に配列していく。さらに、それがどのような活動であるのかについても示している。

表の配列は、西暦・和暦・活動事項・典拠資料・所在・備考・書写年代とし、永辨の活動について、いつ・どこで・（誰が、誰に）・何を・どうしたか、という事項について簡略に示すこととした。活動事項欄の大まかな基準としての用語は「書写・伝授（伝受）・作成・場所」などというもので、特に伝授については、「誰が誰に、どこで」という部分が判明するものについては簡略に示すこととする。備考欄には、必要に応じて、奥書・年齢・その他、補足すべき項目を掲げる。

これら資料は、筆者が高山寺において可能な限り原本調査も実施し誤りのないことを確認しているが、なお遺漏の虞なしとしない。後考を期したい。

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1632	寛永九年	喜海自筆本を書写	高山寺涅槃會法式	133	3			寛永九年
1642	寛永十九年	書写。伝領か？	施餓抄	118	51			寛永十九年
1643	寛永二十年	書写。さらに正保四年心蓮院経蔵本を以って書写	大樂金剛不空眞實三摩耶經般若波羅密多理趣品	36	5		寛永廿年十月一日書了／栂尾陰者／非人永辨　正保四年三月六日以心蓮院経蔵／本寫取之畢金剛仏子永辨	寛永二十年

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1644	寛永二十一年	灌頂加行の時、観海院御本を書写	金剛界次第	95	34	3	朱點（ヲコト點・円堂點、江戸初期）	寛永二十一年
1644	寛永二十一年	中坊経蔵本を書写	表白神分等十八道	95	34	5		寛永二十一年
1644	寛永二十一年	中坊徳圓之房屋にて書写	弘法大師七十二箇條之禁制	112	59			寛永二十一年
1644	寛永二十一年	中坊経蔵本を書写	十八道念誦私次第	95	34	2	朱點（ヲコト點・円堂點、江戸初期）	寛永二十一年
1644	寛永二十一年	書写	羅漢供祭文	113	39			
1644	寛永二十一年	仁和寺眞光院本を書写	護摩抄池上	79	89		此抄以仁和寺眞光院本書写之了／寛永廿一年十一月九日　金剛弟子永弁十九	寛永二十一年
1644	寛永二十一年	中房御本を書写	題未詳	156	13	19		寛永二十一年
1644	寛永二十一年頃	槙尾にて聞書	教誡新學比丘行護律儀聞書	138	24		（表紙）永辨　於槙尾聞之	江戸初期
1645	正保二年	中坊東廊にて顕証本を書写	題未詳	154	93			江戸初期
1645	正保二年	高山寺経蔵本を書写	新編諸宗教蔵総録巻第一	117	37	1		正保二年

（八）

1645	正保二年	高山寺経蔵本を書写	新編諸宗教蔵総録巻第二・巻第三	117	37	2			正保二年
1646	正保三年	閼伽井坊にて書写	諸流通物傳受記	112	28				寛政六年
1647	正保四年	書写	金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經	1	32		于時正保四年正月廿二日不恥悪筆書写之了金剛仏子永辨		正保四年
1647	正保四年	虫払いの時書写、他本にて補う	恒例行業次第	88	11		石水院修理時期不明		正保四年
1647	正保四年	宥厳より伝受	持戒清浄印信	148	75	9			
1647	正保四年	顕証本を書写	持戒清浄印信	148	67		ヲコト點・円堂點		正保四年
1647	正保四年	渡江菴にて書写	金師子章光顯鈔巻上	119	31				正保四年
1649	慶安二年	随心院御門御本を校合石水院経蔵本を書写	金師子章光顯鈔巻下	119	32				江戸初期
1650	慶安三年	書写	臨終大事	110	11	2			慶安三年
1650	慶安三年	伝受	臨終大事（傳授識語）	110	11	3			慶安三年
1650	慶安三年	高山寺閼伽井坊にて石水院経蔵本を書写	華厳十重唯識義	119	11				慶安三年
1650	慶安三年	十無盡院にて両部灌頂を宥厳より伝受	宥厳授與許可印信 受者永辨	110	86	2			慶安三年

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1650	慶安三年	十無盡院にて伝法院流を宥厳より伝受	傳法院流諸大事傳受記	91	17	2	（巻首）伝法院流諸大事伝受記受法下資永辨年廿五夏一四（以下略）	慶安三年
1650	慶安三年	石水院経蔵本を書写	華厳還源觀科二	119	39			慶安三年
1650	慶安三年	虫払いの時、石水院経蔵本を書写	金剛界神秘	63	17		虫払之次以石水院経蔵御本／寫取之了慶安三年六月日／沙門永辨	慶安三年
1650	慶安三年	虫払いの時、石水院経蔵本を書写	高野中院御堂	112	18			慶安三年
1650	慶安三年	法住庵御自筆本を書写	大通法類聚抄	84	28		寛永十九年観海院にて顕証が書写、慶安三年永辨が書写	慶安三年
1650	慶安三年	顕証本を書写	諸尊本経并可引見具書目録	113	72			
1650	慶安三年	石水院経蔵本を書写	小寶螺講日記	113	55			
1650	慶安三年	閼伽井坊にて、顕証自筆本を書写	傳法院流五重大事并三重大事等記	87	115	1		慶安三年
1650	慶安三年	宥厳より伝受	秘密傳法灌頂秘印	110	85	3	「大師」ヨリ「兼海已下如冂流」ニ至ル血脉アリ	慶安三年
1650	慶安三年	宥厳より伝受	宥厳授與許可印信受者永辨	110	9			慶安三年

（一〇）

1654	1654	1654	1653	1653	1653	1653	1653	1652	1652	1651
承応三年	承応三年	承応三年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	慶安五年	慶安五年	慶安四年
顕証自筆本を書写。二九日より求聞持法を始む	顕証自筆本を書写。二九日より求聞持法を始む	閼伽井坊で石水院経蔵本を書写、校合	三尊院宏盛から顕証が伝受されたものを書写	中坊本を書写	顕証自筆本を書写	石水院経蔵の定真本を書写	石水院の仁真自筆本を書写	石水院経蔵本を書写	閼伽井坊にて書写	渡江菴参詣の折、両部印明を伝受・書写
求聞持法	**求聞持次第** 御作	**菩薩戒本持犯要記**	**廣澤傳受私記** 保	**菩提心論異本** **菩提心論愚疑（二書合冊）**	**菩提心論科文**	**光明眞言加持土沙義**	**文永六年灌頂記** 廣澤	**金師子章勘文**	**三時禮釋**	**二翼**
77	76	138	112	127	127	118	112	119	119	84
30	34	22	46	7	39	64	47	27	25	35
承応三甲午年七月廿五日顕証師自筆之本寫之了同自廿九日聞持始行之金剛仏子永辨二十九歳		（朱書）同七月十八日點之了／一校了	金剛仏子永辨／歳廿八						□□（安カ）五年夏比閼伽井房／□之了　沙門永辨	金剛資永辨廿五
承応三年	承応三年	承応三年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	承応二年	慶安五年	江戸初期	江戸初期

（一一）

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1654	承応三年	求聞持法修行中、渡江菴にて顕証自筆本を書写	虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陁羅尼次第	61	31		承応三甲午年七月晦日求聞持修行中以顕証自筆本於渡江菴寫書之了 沙門永辨廿九	承応三年
1654	承応三年	顕証自筆本を書写。廿九日より求聞持法の行を始む	求聞持法	111	100			江戸末期
1654	承応三年	渡江菴にて顕証本を書写	虚空蔵求聞持次第	137	10			承応三年
1655	承応四年	仁和寺天供行の時書写	浴像作法	90	14	6		承応四年
1655	明暦元年	東大寺四聖坊で琳弁が書写したものに、十無盡院にて一校	五教章上巻聞書上自一乗義至分教開宗	123	20			明暦元年
1655	明暦元年	東大寺四聖坊で円智の御講談の時、書写	五教章上巻聞書下自乗（朱補）「教」開合至施設異相	123	19			明暦元年
1655	明暦元年	東大寺四聖坊で御本を永辨書写、琳弁が助筆	五教章上巻聞書下自乗（朱補）「教」開合至施設異相	123	21		東大寺／四聖坊御本申出寫之了／花厳末葉　永辨	明暦元年
1655	明暦元年	東大寺で見性院御本を書写	花厳宗論義	123	22			明暦元年
1655	明暦元年	東大寺金珠院別房で見性院御本を書写	花厳宗論義講師	123	23			明暦元年

1660	1660	1659	1659	1659	1659	1658	1656	1656	1656	1655
万治三年	万治三年	万治二年	万治二年	万治二年	万治二年	明暦四年	明暦二年	明暦二年	明暦二年	明暦元年
閼伽井坊にて顕証自筆本を書写	顕証より伝受ならびに書写	顕証自筆本を書写	宥厳より伝受	菩提院流伝受の時、一覧す	仁和寺尊寿院にて書写	修正後夜の導師を勤め、善財院の本を書写	高野山光臺院にて書写	高野山光臺院にて書写	高野山光臺院にて書写	東大寺で五教章聴聞の余暇に書写
両流肝秘裏書	**両流肝秘傳受記**并菩提院方第三度大事	**印法**	**菩提院方伝授　第三**	**傳受記**	**金剛頂瑜伽護摩儀軌**	**高山寺修正後夜導師作法**	**六書之目**	**六十心網要**	**一念成佛論**慈覚大師御作	**華厳新撰目録／肝要抄**
95	95	110	95	91	61	197	176	125	117	123
24	17	185	24	17	50	69	2	45	47	15
2-3		4-4	1-2	1						
					萬治二年正月廿五日於于尊寿院／寫書之畢　悪筆憚多者也／求法沙門永辨	（奥書）明暦四年正月七日修正後／夜導師　勤仕之砌書寫／之寫本善財院古本也／華厳宗末孫　沙門永弁／三十二				
万治三年	万治三年	江戸初期	江戸中期	安土桃山時代	万治二年	江戸末期	明暦二年	明暦二年	明暦二年	

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1660	万治三年	宥厳より伝受	**最極秘密灌頂印**	95	24	4-2	朱點（ヲコト點・東大寺三論宗點、江戸初期）	万治三年
1660	万治三年	顕証師御奥書之本を書写	**許可**	95	36	3		万治三年
1660	万治三年	十無盡院にて書写	**某授與許可印信**受者覺經	110	87			万治三年
1660	万治三年	十無盡院にて石水院経蔵本を書写	**多聞天講式**	113	69			
1661	万治四年	顕証御草本を書写	**巻數用意抄**	71	2		71函3の写本	江戸中期
1661	万治四年	顕証御草本を書写	**巻數用意抄**	71	3			万治四年
1661	寛文元年	勘注	**涅槃講式勘注**	48	12		寛文元年六月四日勘注之了／沙門永辨	江戸初期
1661	寛文元年	勘注	**如來遺跡講式勘注**	48	10		寛文元年六月廿九日申剋勘注之了／花厳宗末孫永辨	江戸初期
1661	寛文元年	勘注	**遺跡講式勘注**	48	13		寛文元年六月廿九日申剋勘注了／花厳宗末子永辨	江戸初期
1661	寛文元年	勘注	**舍利講式勘注**	48	11		寛文元年閏八月七日粗／勘注之畢	江戸初期
1661	寛文元年	建保三年奥書高弁本に勘注	**涅槃講式勘注**	48	14		寛文元年六月四日勘注功畢／花厳宗末子沙門永辨	江戸初期

1664	1663	1663	1663	1663	1663	1663	1662	1661
寛文四年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文二年	寛文元年
石水院経蔵本を書写	顕証より伝受	仁和寺尊寿院にて伝受	宥厳一周忌の供養に永辨書写　後に顕証が開題供養	仁和寺尊寿院にて両部印可を顕証より伝受	賢首院にて顕証より安井流を伝受	十無盡院南面で安井流伝受の時、師之御本を書写	中坊経蔵本を書写	建保三年奥書高弁本に勘注
祈願集	**顕証授与許可印信**	**愚行傳受記**	**（題未詳）**	**顕證授与許可印信** 受者 永辨	**顕證授与許可印信** 受者 永辨	**延命招魂作法**	**華厳一乗十信位中開廓心境 佛佛道同佛光観法門**	**如來遺跡講式註** 栂尾二月十五日中夜分
87	110	110	166	110	110	第二部	123	48
113	91	149	26	18	16	378	39	15
	2			2				
				（巻首）「傳燈大法師位永辨／授印可」（末尾）右於城州仁和寺尊寿院道場／授両部印可畢／寛文三年癸卯五月十三日／大阿闍梨顕証	（端裏書）「安井御流」（末尾）右寛文三年歳次癸卯二月廿九日戊辰婁宿土曜於賢首院道場奉對師主大阿闍梨顕証受印可畢安井末流弟子永辨	ヲコト點・円堂點（朱書）「一校之了」／寛文三癸卯年於十無盡院南面以師之御本寫取之了沙門永辨于時安井流伝受内也		元治元年七月十七日六角堂能満院大願
寛文四年	寛文三年	江戸中期	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文三年	寛文二年	江戸末期

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1665	寛文五年	石水院経蔵本の四本を顕証が校合、その後摩尼殿にて伝受	華厳入法界四十二字観門	123	38			寛文五年
1665	寛文五年	栂尾山摩尼殿にて顕証より伝授、後日書写	華厳経心陁羅尼	62	125			文化十二年
1665	寛文五年	虫払いの時、高山寺閼伽井房にて書写	観智記上中下	118	65			寛文五年
1666	寛文六年	虫払いの時雑之箱から取り出し書写	華厳佛光観聞書	123	14		（奥書）寛文六年六月廿八日虫払之／次自雑之箱取出之了／大切之聞書故雖少々不／足寫書之了／花厳宗永辨	寛文六年
1666	寛文六年	石水院御本を書写	華厳宗種性義抄	123	41		慧友による奥書写し	弘化三年
1668	寛文八年	十無盡院において石水院経蔵本書写	一切経律論等發題一首	136	6			寛文八年
1669	寛文九年	南勝院實賀自筆本を書写	初後夜	95	32			
1669	寛文九年	古本を書写	三重塔蟲供養請定 寛文三年十月　日	309	11		（紙背）「右之記録永正十四年所記歟」「寛文九己酉年二月／三日以惣寺古本寫書之了／沙門永辨」	江戸初期筆
1669	寛文九年	或人の本を書写	華厳心要	123	37			寛文九年

1672	1672	1671	1671	1670	1670	1670	1670	1670	1669	1669
寛文十二年	寛文十二年	寛文十一年	寛文十一年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文九年	寛文九年
安井大僧正の自筆本を書写	勝恵房の誂えに依りて書写	石水院経蔵本を書写	寛文十一年（存疑）、琳弁が永辨に対して重校し奉じる	明恵上人自筆本を書写	石水院経蔵の喜海自筆本を書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写	永辨御房の本を琳弁が書写	石水院経蔵本を書写	石水院経蔵本を書写
線索抄	**聖天供次第** 私	**常修佛光觀略次第**	**samca 要秘鈔　第八**	**禪法要解卷上・下**	**華嚴清涼國師禮讃文** 并叙	**華嚴經探玄記卷第四**	**續華嚴略疏刊定記卷第四**	**花嚴佛光三昧觀冥感傳**	**華嚴入法界四十二字輪瑜伽法（外題）**	**梅尾説戒日記**
68	82	48	66	136	119	119	119	119	129	48
21	159	17	55	20	15	28	30	26	10	8
				2						
		寛文十一年林鐘廿□／以石水院経蔵本寫之□／永辨之（綴目）寛文十一年六月廿四日虫払□／砌以石水院経蔵本寫之／永辨之	亥正月十四日朱點了同令一校之／同十六日對永辨奉重校了 琳弁							寛文九年「己酉」七月九日以石水院経蔵／之本寫之了　沙門永辨
										同（寛文十二）年五月五日以件御自筆寫書之／了／沙門永辨
寛文十二年	寛文十二年	寛文十一年	江戸中期	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文十年	寛文九年	寛文九年

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1672	寛文十二年	石水院経蔵本を書写	**略付法傳口筆巻上**	112	45	1		寛文十二年
1672	寛文十二年	石水院経蔵本を書写	**略付法傳口筆巻下**	112	45	2		寛文十二年
1673	寛文十三年	石水院御本を書写	**天主光天女**	197	23		（奥書）于時寛文十三年七月／六日以石水院御本寫之／了／沙門永弁	寛文十三年
1673	寛文十三年	石水院経蔵本を書写	**表白**	83	70			寛文十三年
1673	寛文十三年	石水院経蔵本を書写	**涅槃講表白**	197	64		（本奥書）寛文十三年七月一日以石水院／經藏之本寫之了／花嚴宗沙門永弁	弘化三年
1673	寛文十三年	石水院経蔵本を書写	**正月十九日講經**	197	22		（奥書）寛文十三年七月四日／以石水院經藏之本奥／不足也定經可有之間／後見出可書補者也／大切之本／沙門永弁（追記）此講經等ハ東十八箱有之／但目録之外去々散在余／箱可有之間蟲拭之次可相／尋者也　佛子永弁	寛文十三年
1673	寛文十三年	石水院経蔵本を書写	**知識讃嘆**	197	24		（奥書）寛文十三年七月九日以／石水院經藏之本寫之了／花嚴宗沙門永辨	寛文十三年
1673	延宝元年	賢首院本を書写	**華嚴經文義綱目**	123	13			延宝元年

1674	1675	1678	1679	1680	1680	1680	1681	1681	1682	1682
延宝二年	延宝三年	延宝六年	延宝七年	延宝八年	延宝八年	延宝八年	延宝九年	延宝九年	天和二年	天和二年
善財院虫供養の砌、書写	石水院経蔵の定真自筆本を書写	賢首院にて中坊経蔵本を書写	石水院東第八箱定真自筆本を書写	書写	賢首院板本を書写	寶性院の本を書写	高山寺閼伽井坊にて華厳宗沙門永辨　書写	書写	校了	石水院経蔵本を書写
虫供養表白	**明恵上人病中並夜作法**	**修禪要決全**	**（勸内下）**	**仏生会講式**	**十六羅漢識見頌抜書**	**毎月善知識供式　高山寺**	**五十五善知識講式**	**高山寺修正後夜導師作法**	**（演藏鈔目録）**	**華厳宗所立五教十宗大意略抄**
87	159	125	99	113	113	168	48	197	137	123
105	7	40	18	9	77	11	5	66	15	30
									20	
	永辨五十才		此一巻石水院東第八箱有之定真之御自筆也以件本写書之沙門永辨				延宝九年辛酉正月十日於高山寺閼伽井坊／書写早　華厳宗沙門永辨		天和二年校之了　永辨	
延宝二年	嘉永七年	延宝六年	延宝七年	延宝八年		延宝八年	延宝四年	江戸中期	天和二年	天和二年

（一九）

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
1682	天和二年	東大寺で五教章聴聞の余暇に琳弁が借り出し書写し、さらに永辨書写	五教章上巻聞書上自一乗義至分教開宗	123	18			天和二年
1683	天和三年	中坊経蔵の顕証自筆本を書写	光明眞言句義釋鈔	118	47			天和三年
1684	貞享元年	中坊経蔵の本を書写	光言句義釋聽集記巻下	118	50			貞享元年
1684	貞享元年	中坊経蔵の本を書写	光言句義釋聽集記巻上	118	49			貞享元年
1685	貞享二年	虫供養の時書写	表白	87	106			貞享二年
1685	貞享二年	明恵上人の「学問印信」掛板を複製	「学問印信」掛板（複製）				掛板作成	貞享二年
1688	貞享五年	書写	四座式音義明悟上人	113	76			貞享五年
1689	元禄二年	書写	華厳五十要問答後巻	123	11		元禄二年八月十四日写書之不恥悪筆拭老眼　沙門永辨　六十四歳	元禄二年
1694	元禄七年	道練本を借用し書写	五蘊觀并聞書	125	33		元禄七年六月令借用件道練本写書之了　十無盡院沙門永辨六十九歳	元禄七年

以下、年次未詳につき、書写奥書の順に配列

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
	年次未詳	所持	（無題作法）	155	1		（表紙）高山寺／地蔵院 （表紙見返）永辨	室町初期
	年次未詳	所持	法流大底	112	6		（裏表紙）永辨／新寫之本／十無盡院聖教ニ有之／分明見安也	室町初期
	年次未詳	所持	普賢法	111	117		外題下「永辨之」	室町末期
	年次未詳	所持	番心五　包紙	110	80	1	（表書）番心五　永辨上人	江戸初期
	年次未詳	寛永元年、菊師より顕証が伝受され、この年以降、永辨加筆	番心五 永辨血脈	110	80	2	真空上人已下血脈不載之後世相承迷之歟／依之愚僧別紙書之番心五一枚之内籠之／印玄上人記并脩怡法印記相承次第以寫之／于時寛永元年八月十日對菊師伝受之後記之／下資顕証／東禅院／理覚房心蓮	江戸初期
	年次未詳	寛永元年、印玄上人本を顕証が書写し、この年以降顕証本を書写	第九大事記印玄上人	110	83	3		江戸初期
	年次未詳	寛永元年、行乗本を顕証が書写し、この年以降顕証本書写	第九大事 小嶋大事當流相承由來行乗法印所注	110	83	4		江戸初期
	年次未詳	顕証本を書写	第九大事記　顕證上人	110	83	2	これ以降に顕証本を書写	江戸初期

西暦	和暦	活動事項（書写・伝受・その他）	資料名	函	番号	子番号	備考（奥書・その他特記事項）	書写年代
	年次未詳	所持	菩提院流傳受記	95	16		（表紙）永辨之	江戸初期
	年次未詳	永辨に至る血脈	（印可作法及血脈）	137	18	1	大日より永辨に至る血脈あり	江戸初期
	年次未詳	中坊の本を書写	法則集	197	30		（奥書）（朱書）「此聲明集先師隆弁上人御筆也」以中坊三卷之法則寫取之仍爲正本者也／沙門詠弁	江戸初期
	年次未詳	書写カ	佛光三昧觀異本	123	42		（表紙）永辨　私抜出之	江戸初期
	年次未詳	所持	華嚴善知識禮文	119	43			江戸初期
	年次未詳	宥厳より許可印信を授与	宥嚴授與許可印信（受者永辨）	110	185	2-7	印信・目録等一括	江戸初期
	年次未詳	書写	尊勝院律師快禪許可事	110	150		（奥書）永辨書之	江戸中期
	年次未詳	所持	大方廣佛華嚴經卷第五十二	155	7		永辨阿闍梨平常為持経所書也	江戸中期
	年次未詳	所持	大方廣佛華嚴經十無盡藏品	155	8		永辨自筆か	江戸中期
	年次未詳	所持	覺	155	43		先師永辨闍梨行用次第／可秘帳中（表面）一鳥羽繪　重筥入／四軸	江戸中期
	年次未詳	書写	梵網經古述記聽聞備忘記	137	15	19	（奥書）古述聽聞初為廃／忘記之沙門永辨	江戸末期

年次未詳	所持	**善知識供式**	113	52	1	上人手沢	
年次未詳	所持	**御影供祭文**	113	40		上人手沢	
年次未詳	所持	**菩提院方伝受　包紙**	95	24	1-1	（表書）永辨	
年次未詳	涅槃会表白を書写	**涅槃會表白包紙**	177	87		（表書）「涅槃会表白」「永辨上人筆跡也」「十無盡院」	
年次未詳	顕証から伝受	**愚行傳受日記包紙**	177	97		（表書）永辨	

四

右の年表から明らかになったことを掲げておく。

1、永辨は寛永三年（1626）に生まれ、没年は未詳であるが、記録としては、元禄七年（1694）「五蘊観并聞書」を書写したことが知られ、永辨六十九歳であった。その後の記事は見当たらない。「華厳五十要問答後巻」の奥書に「元禄二年八月十四日写書之不恥悪筆拭老眼　沙門永辨六十四歳」とあることから、元禄七年以後没したものと見られる。

永辨の活動として最も多いのは、聖教の書写で、少なくとも一〇〇回に及んでいる。最も早いのは、寛永九年（1632）の奥書を有する「高山寺涅槃會法式」（133函3）であるが、当時永辨はわずか六歳であり、疑念なしとしない。その次に書写が確認できるのは、寛永二十年（1643）の「大樂金剛不空眞實三摩耶經般若波羅密多理趣品」（36函5）で永辨十八歳の時であって、十二年の開きがある。書写の初例に関しては引き続き検討したい。

次に多いのは、伝受に関するもので、宥厳から延べ十回（印信授与も含む）、顕証から八回、不明三回の記録がある。最も早い伝受は、正保四年（1647）宥厳より「持戒

（一二三）

清浄印信」を伝受されたときで、永辨二十二歳の時である。その三年後には、同じく宥厳から両部灌頂、さらに伝法院流も伝受されている。顕証からの伝受はそれより遅れ、寛文三年（1663）に東密の安井流、さらに同年両部印可を受けているのが最初である。この事から、永辨は初め宥厳から、後に顕証からも伝受を受けていることが判明する。逆に、永辨からの伝授については、今のところ確認できる記録が見られない。筆者が以前検討した「持戒清浄印信」を巡る受容に関しても、永辨から他の僧侶に対する印信の授与は、文化五年（1808）慧友の奥書を有する「持戒清浄印信」（157函33-8）一通にある血脈に、

宥厳僧正
顕証――永辨――○――宥弁――（以下略）
詮弁

とあるだけで、永辨が直接詮弁に伝授したという資料は見られない。(注九)

その他の活動として、槙尾、東大寺の講義に参加したり、求聞持法を修する、校合・勘注を加えるなどや、導師を努めるなどの履歴が知られる。

（二四）

2、次に、永辨の活動範囲について言及する。永辨は十無盡院十六世であるので、当然「十無盡院」あるいは「閼伽井坊」における活動が大半である。その他、高山寺内の僧房としては、賢首院が二回、中坊（観海院）が一回登場する。寺外においては、仁和寺（七回）、東大寺（五回）、高野山（三回）となっており、意外に活動範囲が広いことが感じられる。もちろん、仁和寺、高野山では真言宗関係の書写を、東大寺においては華厳宗関係典籍の書写や五教章の聴聞に参加している。これらから、永辨は明恵上人と同様、華厳・真言兼学の僧侶であったことが知られるのである。

3、書写を行った底本について見るに、寺内石水院経蔵本を書写することが大半であるが、中坊（観海院）本も次いで多い。その他寺内僧房名を見るに、善財院、賢首院がある。寺外として最も多いのは、師である顕証本（法住庵も含む）が十八回と多数を占める。(注十) しかしながら、永辨最初の師と目される宥厳の本を書写したという記録が見られないのは注目される。

ほかに、高山寺草創期の明恵上人、義林房喜海、空達房定真の自筆本を書写したという記録もみられる。

4、永辨の書写した資料にはヲコト点が加点された聖教がある。まず、寛永二十一年（1644）に「金剛界次第」を書写しているが、これには円堂点が加点されており、永辨による書写・加点の初例と見ることができる。これは、その奥書によれば、潅頂加行の時に観海院本を書写したのが現存本であるという。円堂点は主に仁和寺において用いられたヲコト点であり、潅頂というのも仁和寺の宥厳との関わりも想起される。円堂点の加点資料は他に三点があり、主に永辨二十代の頃である。

他に、東大寺三論宗点の加点資料が一点現存する。万治三年（1660）宥厳より伝授された「最極秘密灌頂印」一通に、朱点の東大寺三論宗点が加点されている。真言宗菩提院流の伝授であり、あるいは宥厳による加点とも考えられるが、永辨が全く関与していないとも見られないのではないだろうか。築島裕氏は、このヲコト点の使用について以下のように述べている。(注十一)

東大寺点は、東大寺、醍醐寺、石山寺、高野山、勧修寺の各寺に行はれてゐたことが知られる。これらの寺院で加点された聖教類は何れも真言系統の密教関係の経典儀軌類であつて、東大寺点が真言宗の中に広く行はれてゐたことが明であるが、真言宗の中でも聖寶の流を引く、所謂小野流の系列の中で多く行はれたことが顕著である。

（築島1996、p467）

このことから、仁和寺の宥厳が東大寺三論宗点を使用していたとしても不自然ではなく、高山寺においても、主に理明房興然の流れを引くヲコト点として広く使用されていたものである。(注十二)

以上、永辨に関する事績について、その活動履歴の概略を高山寺内に現存する記録から辿ってみた。今後、寺内の広範な活動内容と照合した調査検討を続けて行きたい。

（二五）

注

一、徳永良次「高山寺諸院代々一覧」、平成十九年度高山寺典籍文書綜合調査団編「研究報告論集」、2008年
二、『古寺巡礼　京都15　高山寺』、井上靖／葉上照澄、淡交社、1977年
三、注一に同じ。
四、『密教大事典』、法蔵館、「覚深」「顕証」の項
五、『高山寺典籍文書の研究』、東京大学出版会、1980年
六、「現代密教」第27号、総本山智積院、2017年
七、徳永良次「高山寺における方便智院聖教について　定量分析の試み」、「訓点語と訓点資料」第一二七輯、訓点語学会、2011年
八、北海学園大学大学院文学研究科『年報　新人文学』第七号、2010年
九、注八に同じ。p 114。
十、ただし、顕証本であっても、高山寺経蔵の蔵書である聖教を書写している事が多い。
十一、築島裕『平安時代訓点本論考　研究篇』、汲古書院、1996年
十二、宮澤俊雅「高山寺に於ける理明房興然流口決の訓点の相承について」（「訓点語と訓点資料」第九五輯、訓点語学会、1995年）

付記　本稿は、平成28年度　北海学園学術研究助成（一般）による成果の一部である。